特集　世界に誇る伝統芸能

日立風流物（ふうりゅうもの）の舞台裏

日立市が世界に誇る伝統芸能として市民に親しまれている「日立風流物」。毎年４月に日立さくらまつりで公開されるほか、来春には、７年に１度行われる神峰神社大祭礼で、４台ある風流物の山車が一斉公開されます。

300年以上前から受け継がれてきた風流物を、今も変わらず楽しむことができるのは、その裏で携わっている人たちの情熱とプライドがあるからです。

今号では、風流物の歴史をたどるとともに、今年のさくらまつりで風流物を公開した、日立郷土芸能保存会の本町支部に密着し、その舞台裏に迫ります。

Chapter 1 歴史をひも解く

－戦火を越えて－

風流物の伝統を守り続ける日立郷土芸能保存会。会長の水庭久勝さんとともに、風流物の歴史をひも解きます。

はじまりは江戸中期

高さ15メートル、重さ5トンの巨大な山車の中に約40人が乗り込み、からくり人形の芝居や、太鼓・笛の鳴物を披露する日立風流物。その起源は古く、「はじまりは江戸時代。今から３００年以上前なんです」と水庭さんは言います。

元禄８年、水戸黄門として知られる徳川光圀公の命により、神峰神社が宮田・助川・会瀬の３村の鎮守となりました。その際、宮田村の氏子たちが、まちの豊かな暮らしを願って山車を造り、祭礼に奉納。これが日立風流物のはじまりといわれています。

風流物が誕生した江戸中期は、人形浄瑠璃が一世を風靡（ふうび）した時代。その影響を受けた当時の村人たちが、山車に人形芝居を組み合わせていったと考えられています。

風流物が現在の５層の造りとなったのは、明治中期から大正初期にかけて。水庭さんは「風流物が受け継がれた宮田町の４つの地区（東町、北町、本町、西町）が、出来栄えを競い合って改良を重ねていく中で、大型化していったのです」と話します。

戦火で焼けた風流物と立ち上がった地元有志たち

村人たちの大きな娯楽にもなっていた風流物。しかし昭和に入り、太平洋戦争へと向かう世相を受けて、昭和11年以降は公開を中断。そして昭和20年７月、戦火により、山車や人形のほとんどが焼けてしまいました。図面もなく、残ったのは一部の人形の首（かしら）のみ。「きっとみんな、風流物はここで途絶えてしまうと思ったでしょうね」と水庭さんは言います。

危機的状況の中、風流物の復活のために立ち上がった人がいます。宮田風流物保存会（現在の日立郷土芸能保存会）の初代会長、根本甲子男（かしお）さんです。伝承などを基に、地元の有志たちと風流物の復活に向けて奔走。その努力が実を結び、昭和32年に県無形文化財の指定を受けると、翌年には、苦労の末に１台ながら復元を果たし、21年ぶりに風流物の公開を成し遂げました。

「私が生まれた時には戦争で風流物の公開が中断されていました。山車を初めて見たのは復元されたとき。とにかく『でかい！』と思いました」。当時を振り返り、水庭さんは目を細めます。「ほとんど何も残っていなかった状況で復元させた根本さんたちの熱意と努力は、凄まじいものだと思います」。大きな危機を乗り越えて、風流物は再び息を吹き返しました。

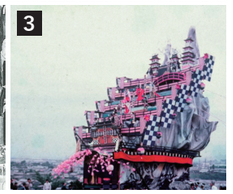
世界に誇る伝統芸能へ

昭和34年、風流物は、山車や屋台などとしては全国で初めて国の重要有形民俗文化財に指定されました。山車の組立や運行、人形の製作と操作、鳴物演奏などのすべてが氏子たちの手によって行われたことが、高く評価されたのです。

その後、４台すべてが復元された風流物は、国の重要無形民俗文化財に指定されるなど、更にその評価を高め、日立市が誇る伝統芸能として多くの人に親しまれていきます。そして平成21年、京都祇園祭の山鉾行事とともに、ユネスコ無形文化遺産となります。風流物が、日本を代表する伝統芸能として世界に認められた瞬間でした。

日立郷土芸能保存会
会長　水庭 久勝さん

1 大正時代の風流物公開の様子
2 人形の首（かしら）を作る根本甲子男さん
3 昭和33年、復元を果たし、22年ぶりに公開された風流物



Pick up

風流物の沿革

1695年（元禄８年）　神峰神社が宮田・助川・会瀬の３村の鎮守となり、山車を祭礼に奉納（風流物のはじまり）

1945年（昭和20年）　戦火により山車や人形などの大半が消失

1954年（昭和29年）　根本甲子男氏らが宮田風流物保存会（のちに日立郷土芸能保存会に改称）を結成

1957年（昭和32年）　茨城県無形文化財に指定

1958年（昭和33年）　風流物１台を復元、21年ぶりに公開

1959年（昭和34年）　国の重要有形民俗資料（のちに重要有形民俗文化財と改められる）に指定

1966年（昭和41年）　全ての風流物の復元を完了

1968年（昭和43年）　戦後初の４台が出揃った神峰神社大祭礼

1970年（昭和45年）　大阪万博で公開

1974年（昭和49年）　大甕ゴルフ場で昭和天皇・皇后両陛下に天覧公開

1977年（昭和52年）　４台が国の重要無形民俗文化財に指定

1988年（昭和63年）　日立さくらまつりで１台公開（以降毎年４町が回り番で公開）

1994年（平成６年）　平安遷都1200年記念祭（京都市）で４町合同で１台公開

1998年（平成10年）　神峰神社大祭礼で４台公開（以降７年ごとの大祭礼で公開）

2009年（平成21年）　ユネスコ無形文化遺産に登録

Chapter 2

命を吹き込む

－人形と鳴物－

戦火での危機を乗り越え、現代へと受け継がれてきた風流物。日立の春の風物詩「日立さくらまつり」では、4地区（東町・北町・本町・西町）の山車が毎年回り番で公開されています。

今年の担当は本町支部。公開までの舞台裏に迫りました。

人形と鳴物の担い手

笛や太鼓の音色に合わせて、躍動感あふれる動きを見せるからくり人形芝居。風流物に命を吹き込むのは、からくり人形を製作し、操る「作者」と呼ばれる方々や、笛や太鼓で芝居をリードする「鳴物」を担当する方々です。

今年のさくらまつりで風流物を公開した日立郷土芸能保存会の本町支部は、世代交代のため、初めて人形の作者や鳴物を担当するメンバーも多くいました。4月の本番に向け、何か月も前からメンバーたちの練習が始まります。

風流物を盛り上げる鳴物

お囃子（はやし）の曲目やテンポ、曲調で人形の演技をリードする鳴物担当。太鼓を3人、笛を5人、鉦（かね）を1人程度が担当します。鳴物の音色は、お祭りの雰囲気をより一層引き立て、場を盛り上げるために欠かせないものです。

「風流物はもともと長男だけが受け継ぐ〝一子相伝（いっしそうでん）〟という考えがあったので、お囃子の楽譜は残されていません」。そう話すのは、今回、鳴物長を務める栗原信夫さん。「鳴物は耳で聞いて覚えながら、4町がそれぞれ受け継いできました。その過程で少しずつアレンジが加わったことで、4町とも同じ曲を演奏しているはずなのに、実はテンポや曲調が少しずつ違っているんです」。

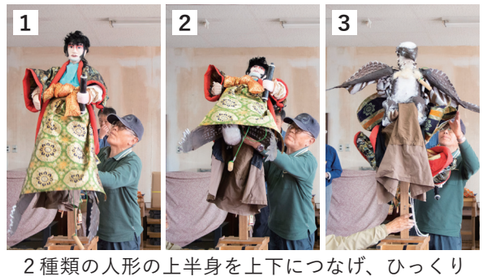
時代によって、また、支部によって異なるお囃子。それを聞き比べるのも楽しみ方の一つと栗原さんは話します。

定年後にチャレンジ

練習中、ほかのメンバーに積極的にアドバイスを求めているのは、今回初めて風流物に参加し、笛の演奏を担当する水庭 聖（きよし）さん。「子ども鳴物」があって、そこに参加していたので、いつかは本格的に関わっていきたいと思っていました」と話す水庭さんは、会社の定年退職を機に参加を決意。もともと趣味で音楽に携わっていた経験を生かし、曲を聞きながら自分で楽譜を書き起こしました。「年を取ってのデビューですが、楽しんでやっています」。笑顔で話す水庭さんの表情は、生き生きと輝いていました。

1 メンバーにアドバイスを求める水庭 聖さん（写真左）
2 鳴物は太鼓3人、笛5人、鉦（かね）1人で構成される
3 鳴物長の栗原信夫さん

人形1体には複数の糸がつながっている。作者はこの糸を操って人形を巧みに動かす。



2種類の人形の上半身を上下につなげ、ひっくり返すことで瞬時に人形を変える「早返り」

からくり人形を操る作者

風流物で人々の注目を集めるからくり人形。巧みに操られた人形が刀を振るい、弓矢を放つ様や、一瞬にして別の人形に変わる「早返り」は、見るものを驚かせ、楽しませます。その裏には、人形を操作する作者の試行錯誤の日々がありました。

複数の糸で人形を動かす

人形に取り付けられた複数の糸。作者はその糸を操ることで人形を動かします。

父親の代替わりとして今回から参加することになった大畑将徳（おおはたまさのり）さんは、「子どもの頃から見てきた風流物を、いつかはやってみたいと思っていました。実際やってみると、なかなか難しいですね」と話します。どの糸をどう動かせば、人形がどう動くのか。自主練習のため、家に人形を持ち帰ることも。「感覚がつかめるまで、とにかく練習を積んでいくしかない」と話す大畑さんは、真剣なまなざしで練習に励んでいました。

真剣なまなざしで練習に励む大畑将徳さん

放たれた矢は縁起物

人形芝居の中でも人気が高いのは、人形が矢を放つ技。難易度が高く、成功すると多くの歓声が上がります。その矢はいつしか縁起物として扱われ、本番では見物客がこぞって拾う様子が見られます。

「正直、プレッシャーはかなり感じています」。そう話すのは、矢を放つ人形を操る鈴木賢昭（よしあき）さん。「でも、やっぱり見に来てくれる方に喜んでもらいたい。少しでも多く成功できるようにがんばります」。鈴木さんはベテランの方からアドバイスを受けながら練習を繰り返していました。

アドバイスを受けながら矢を放つ鈴木賢昭さん（写真右）

Chapter 3

舞台を整える

－山車の組立－

高さ15メートル、重さ5トン。
先人たちが創り上げたその巨大な舞台は、
公開の度に組み立てられます。

山車の組立

神峰神社にある風流物収蔵庫。ここには、解体された4町の山車が収められています。

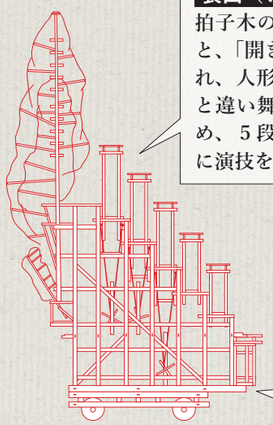
さくらまつりが近づくと、支部のメンバーは収蔵庫に集まり、山車を組み立てるための事前準備として、部品の確認や、「藤切り」などを行います。

本格的な組立作業は、まつり開催の3日前から。山車の部品を会場まで運び、前日までに組み立てます。そして、まつりが終わると再び解体し、収蔵庫に収めます。

部品の確認　収蔵庫内の部品に破損や紛失がないかを確認していく。20年ほど携わっているメンバーでも「どこに何があるのか、どの部品なのかを把握するのが大変」と話すほど部品の数や種類は豊富にある。

藤切り　岩山を模した山車の裏山（うしろやま）には、ごつごつとした膨らみを表現するため、藤の蔓（つる）を使う。蔓は保存することができないため、会員たちは公開の度に藤の蔓を採取する。

Pick up
日立風流物のしくみ



構造

高さ	15m
幅	3～8m
奥行	7m
重量	5t

表山（おもてやま）
拍子木の合図で囃子が始まると、「開き」によって舞台が現れ、人形芝居が始まる。劇場と違い舞台転換ができないため、5段ある舞台の各段ごとに演技を行う。

裏山（うしろやま）
岩山を模した裏山の舞台。岩山の模様が描かれた木綿布をかぶせ、藤蔓で膨らみを表現している。

土台
上土台と下土台の2層で構成されている。上土台のみを回転させることで、表山から裏山への転換を行う。

舞台を扇のように開く「開き」。狭い道幅でも移動できるように、舞台を折りたたむからくりが考案された。

裏山の演技時には、観客が移動しなくても見れるように、人力で上土台を180度回転させる。

本番3日前、山車の組立が始まる。

降り続く雨、進まない組立作業

さくらまつり開催の3日前。山車の組立作業が始まりました。しかし、天候はあいにくの雨。翌日まで降り続き、作業は思うように進みません。

例年、本番までの3日間は、組立作業に加え、山車に乗り込んでのリハーサルを行います。しかし今回は、降り続く雨により、2日経った時点で進捗は半分以下。「こんなんじゃ終わらないよ！」「ここまで進まないのは初めて」。予定よりも大幅に遅れている状況に、メンバーの中から不安の声が上がります。

木造ゆえに

さまざまなからくりが施されている山車。そのほとんどが木材でできていますが、雨にぬれると木が膨張してしまうため、仕組みがうまく作動しないことがあります。そのため、組立の際にはできるだけ雨にさらされないように気を配る必要があり、それが、作業が進まない一因となっていました。

夜遅くまで続いた作業

公開の前日。ようやく天候に恵まれたこの日は、急ピッチで作業を進めます。徐々に荘厳な姿を見せる山車。その様子に、道行く人たちも思わず歩みを止めます。

作業は暗くなるまで続き、午後8時過ぎ、ようやく完成間際までたどり着いたところでこの日の作業は終了。公開当日の朝早くから仕上げの作業を始め、本番前に山車の組立を終えました。迎えるは、いよいよ本番です―。

1 足場を組み、山車の組立が始まる
2 **3** 雨の中、悪戦苦闘しながら作業を進めるメンバーたち　**4** **5** 組立作業3日目。ようやく天候に恵まれ、急ピッチで作業を進める　**6** 完成が近づく山車の姿に思わず道行く人も足を止める
7 夜遅くまで続く作業　**8** 完成間際の山車の姿

Pick up

親子二代で参加

親子で参加した北見総一朗さん（右）と昂輝（こうき）さんは、共に鳴物を担当。「初めて息子と一緒にできて、やっぱり嬉しかった。周りに迷惑をかけないか心配だったが、思ったよりうまくやっていたと思う」と話すのは総一朗さん。息子の昂輝さんは「実際に山車の中で太鼓を叩くと、音の響きが全然違う。最初は自信がなかったけれど、周りの方たちをお手本にして、何とか乗り切れました」と充実した様子。「これを機に自分も伝統を引き継ぐ一人となって、後世につなげられるように頑張っていきたい」と、これからの決意を語ってくれました。

風流物の露払い「日立のささら」

日立さくらまつりや神峰神社大祭礼で、風流物の露払（つゆ）いの役目を果たす「日立のささら」。市内７地区で継承され、県指定無形民俗文化財となっています。今年は会瀬地区のささらが公開されました。

新しい収蔵庫を建設中

公開終了後、山車はその日のうちに解体し、収蔵するため、作業は深夜まで続きます。市では、会員の負担を軽減するため、収蔵作業を効率よく行えるよう、新たな収蔵庫の建設を進めています。

6 きらびやかな表山の演技
7 岩山を舞台とした裏山の演技
8 集まった多くの見物客
9 荘厳さが一層際立つ夜の風流物

Chapter 4 いざ表舞台へ
－公開のとき－

1 山車に括り付けられた綱を数十人で引き、組立場所から公開場所まで山車を移動させる「曳山（ひきやま）」。掛け声とともに引かれる様は迫力満点

2 山車の内部。１段目には鳴物担当が乗り込み、笛や太鼓で人形の演技をリードする
3 ２段目より上は作者がひしめき合い、せわしなく動き回っている　4 全体の進行の音頭は拍子木を用いて行う　5 公開の様子を見守る人形作者リーダーの蛭田正春さん

公開当日

迎えたさくらまつり当日。初めて参加するメンバーからは緊張の色がうかがえます。

組立場所から公開場所まで山車が会場内を移動する「曳山（ひきやま）」を終え、集まった観客たちが見守る中、いよいよ公開のときを迎えました。

緊迫感に包まれる舞台裏

風流物は「表山」と「裏山」で演目が分かれます。

本町支部の表山の演目は「風流時代絵巻」。上杉軍と武田軍による川中島の戦いなどを演じます。

裏山は化け物や動物が登場するものが多く、今回の演目「風流日本の神話」でも、スサノオノミコトが大蛇を退治する物語が演じられました。

華麗な演技とは裏腹に、山車の内部では作者たちの怒号に近いかけ声が飛び交います。風流物はまつり期間中の２日間で５回公開されますが、リハーサルが雨でできなかったこともあり、特に１回目の公開では、山車の「開き」がなかなか作動しなかったり、伝令がうまく伝わらなかったこともあり、現場はかなりの緊迫感に包まれていました。

次第に洗練されていく演技

反省の声が多く挙がった１回目の公開。しかし、人形作者のリーダーである蛭田正春さんは言います。「練習と本番では環境が全然違う。本番を経験することが一番の練習になる」。

その言葉通り、公開を繰り返すにつれ、経験者は勘を取り戻し、新たに加わったメンバーも雰囲気に慣れてきたのか、次第に洗練されていく演技。最後の公開を無事終えたメンバーの表情には、充実感と達成感がみなぎっていました。

日立郷土芸能保存会　本町支部の皆さん

Chapter 5

未来へ紡ぐ

－風流物のこれから－

「世代交代」を掲げて臨んだ日立さくらまつりでの公開。そして、未来の風流物について―。本町支部長の根本雅文さんに話を聞きました。

Interview

さくらまつりを振り返って

今回のさくらまつりでは、ベテランは支援に回り、新人や中堅の方たちに引き継いでいく「世代交代」を一つの目的として取り組みました。

新人の方は、初めての演技で、しかもリハーサルができず、最初は緊張やプレッシャーがあったと思います。それでも回を重ねるごとに表情に自信が満ちていき、演技も良くなっていきました。これから更に場数を踏んで、自分なりに風流物を昇華していってほしいですね。

中堅の方は、練習や準備を通して、これからは自分たちが引っ張っていかなければという気概が感じられ、とても頼もしく感じました。

振り返ってみて、課題はあったものの、みんな本当によくがんばってくれたと思います。来年の神峰神社大祭礼では、きっと更に磨きをかけた演技を披露できるはずです。

日立の宝を後世に残していくために

風流物は、もともとは町内の限られた人にだけ引き継がれてきました。しかしそれでは、担い手が減ってきている中で、いずれ限界を迎えてしまうと思います。

昔は競い合う対象であった4町も、今は協力し合って、後継者の勧誘や育成について話し合っています。その中で、日立の宝である風流物を後世に残していくためにも、今はどんどん参加対象を広げていこうという考えに変わってきました。実際、今回のメンバーにも町内以外の方がいます。風流物をやってみたい、興味があるという方がいれば、ぜひ参加してもらいたいですね。

風流物の未来への想い

人を楽しませるためには、まずは自分が楽しむことが一番大事です。風流物はボランティアでやっているものですが、みんな、おまつりが好きだから参加しています。自分たちが楽しまないと続かないですし、当然周りにも楽しさが伝わりません。門戸を広くすることで、たくさんの方に風流物に参加していただき、一緒に楽しんでいければと思っています。

風流物は地域に根付いているもので、地元の誇りです。先人たちが引き継いできた唯一無二の風流物を、次の世代につなぎ、そして、その先の未来にも届けなければなりません。たとえ市外、県外の方であっても、参加してみたいという思いがあれば受け入れ、全国に広めていきたいです。

市外に出た人たちが、「ふるさと日立の祭り」であるさくらまつりが開催されるたびに帰ってくる。これからも風流物がさくらまつりの中心的存在であり続けてほしいと願っています。

日立郷土芸能保存会　本町支部
支部長　根本 雅文 さん

Information

風流物に携わりたい方や、お手伝いしたい方、興味がある方は、まずは郷土博物館にご連絡ください。

郷土博物館　☎ 23-3231

7年に一度、山車の共演。

神峰神社大祭礼　来年5月開催予定

こちらも Check

市公式 You Tube で、前回の神峰神社大祭礼で奮闘した方たちの姿を追った動画、「日立風流物つなぐ、誇りと伝統」を公開しています。